

山の手小景

泉鏡花

青空文庫

やらいちやう
矢來町

「お美津、おい、一寸、あれ見い。」と肩を擦合はせて居る細君を呼んだ。旦那、其の夜の出と謂ふは、黄な縞の銘仙の袷に白縮緬の帶、下にフランネルの襯衣、これをながじゆばんらゐ、長襦袢位に心得て居る人だから、けぱくしく一着して、羽織は着ず、洋杖を ついて、紺足袋、山高帽を頂いて居る、脊の高い人物。

「何ですか。」

と一寸横顔を旦那の方に振向けて、直ぐに返事をした。此の細君が、慥う又直ちに良人の口に應じたのは、蓋し珍しいので。……西洋の諺にも、能辯は銀の如く、沈黙は金の如しとある。

然れば、神樂坂へ行きがけに、前刻郵便局の前あたりで、水入らずの夫婦が散歩に出たのに、餘り話がないから、

(美津、下駄を買ってやるか。)と言つて見たが、黙つて返事をしなかつた。貞淑なる細君は、其の品位を保つこと、恰も大籬の遊女の如く、廊下で會話を交へる

のは、仿はしたないと思おもつたのであらう。

(あゝん、此このさきの下駄屋げたやの方が可えか、お前ま好なな處ところで買かへ、あゝん。)と念ねんを入いれて見みたが、矢張やつぱり黙だまつて、爾時そのときは、おなじ横顔よこがほを一ちよつと寸背そむけて、あらぬ處ところを見みた。

丁度ちやうど左側ひだりがはを、二十ばかりの色の白しろい男をとこが通とほつた。旦那だんなは稍濁やゝにごつた聲こゑの調子てうし高だかに、

(あゝん、何どうぢや。)

(嫌いやですことねえ、)と何なにとも着つかぬことを謂いつたのであるが、其間そのかんの消せう息そ自おのづから神しん契いもくわい默もく會わい。

(にやけた奴やつぢや、國賊こくぞくちゆう!)と快こゝろよげに、小指こゆびの尖さきほどな黒子ほくろのある平ひらたな小鼻こばなうを蠢ごめかしたのである。謂いふまでもないが、此このほくろは極きはめて僥倖げうかうに半なかばは髯ひげにかくれて居ゐるので。さて銀側ぎんがはの懷中くわいちゆう計どけいは、散策さんさくの際さいも身みを放はなさず、件くだんの帶おびに卷まきつけてあるのだから、時ときは自分じぶんにも明あきらかであらう、前さきに郵便局いうびんきよくの前まへを通とほつたのが六時三十分で、歸かへり途みちに通とほり懸かつたのが、十一時じふいちじ少々せうく過ぎすて居ゐた。

夏なつの初めではあるけれども、夜よるの此この時分じぶんに成なると薄うすら寒さむいのに、細君さいくんの出では縞しまのフランネルに絲織いとおりの羽織はおり、素足すあしに蹈臺ふみだいを俯うつ着つけて居ゐる、語ごを換かへて謂いへば、高たかい駒下駄こまげたを穿はいたので、悉くはしく言いへば泥どろぼツくり。旦那だんなが役所やくしよへ通かよふ靴くつの尖さきは輝かがいて居ゐるけれど

も、細君の他所の穿物は、むさくるしいほど泥塗れであるが、惟ふに玄關番の學僕が、悲憤慷慨の士で、女の足につけるものを打棄つて置くのであらう。

其の穿物が重いために、細君の足の運び敏活ならず。が其の所爲で散策に恚る長時間を費したのではない。

最も神樂坂を歩行くのは、細君の身に取つて、些とも樂みなことはなかつた。既に日の内におさんを連れて、其の折は、二枚袷に長襦袢、小紋縮緬三ツ紋の羽織で、白足袋。何のためか深張傘をさして、一度、やすもの賣の肴屋へ、お總菜の鰯を買ひに出たから。

茗荷谷

「おう、苺だ苺だ、飛切の苺だい、負つた負つた。」

小石川茗荷谷から臺町へ上らうとする爪先上り。兩側に大藪があるから、俗に暗がり坂と稱へる位、竹の葉の空を鎖して眞暗な中から、烏瓜の花が一面に、白い星のやうな瓣を吐いて、東雲の色が颯と射す。坂の上の方から、其の苺だ、苺だ、

と威勢よく呼はりながら、跣足ですたくと下りて来る、一名の童がある。

嬉しくツてく、雀躍をするやうな足どりで、「やつちあ場ア負つたい。おう、負つた、負つた、わつしよいく。」

やがて坂の下口に來て、もう一足で、藪の暗がりから茗荷谷へ出ようとする時、「おくんな。」と言つて、藪の下をちよくと出た、九ツばかりの男の兒。脊丈より横幅の方が廣いほどな、提革鞆の古いのを、幾處も結目を拵へて肩から斜めに脊負うてゐる。

これは界限の貧民の兒で、つい此の茗荷谷の上に在る、補育院と稱へて月謝を取らず、時とすると、讀本、墨の類が施に出て、其上、通學する兒の、其の日暮しの親達、父親なり、母親なり、日を久しく煩つたり、雨が降續いたり、窮境目も當てられない憂目に逢ふなんどの場合には、教師の情で手當の出ることさへある、院といふが私立の幼稚園をかねた小學校へ通學するので。

今大塚の樹立の方から颯と光線を射越して、露が煌々する路傍の草へ、小さな片足を入れて、上から下りて来る者の道を開いて待構へると、前とは違ひ、歩を緩う、のさくと顯はれたは、藪龜にても墓にても……蝶々蜻蛉の餓鬼大將。

駄々を捏ねて、泣癪が著いたらしい。への字形の曲形口、兩の頬邊へ高慢な筋を入れて、澁を刷いたやうな顔色。ちよんぼりとある薄い眉は何やらいいたいけな造だけれども、鬼薊の花かとはかりすらくと毛が伸びて、悪い天窓でも撫でてやつたら掌へ刺りさうでとげくしい。

着物きものは申すまでもなし、土と砂利と松脂と飴ン棒を等分に交ぜて天日に乾したものほかに外ならず。

勿論素跣足で、小脇に隠したものを其まゝ持つて出て來たが、唯見れば、目筈の中充満つばいに葉ながら撮んだ苺であつた。

童は猿眼で稚いのを見ると苦笑にがわらひをして、

「おゝ！ 吉公か、ちよツ、」

と舌打、生意氣なもの言ひで、

「驚かしやがつた、厭になるぜ。」

苺は盗んだものであつた。

明治三十五年十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山の手小景

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>